

研究ノート

資本論における方法と世界観（中、その一）

——その残された諸問題の一つについて——

梯 明 秀

内容の目次

まえおき

- 一、方法ということ
- 二、世界観ということ
- 三、近代経験科学の体系化
- 四、近代科学としての経済学における体系化
- 五、賃労働者の実存形態——（以上、第一号掲載）
- 六、マルクス主義の成立——（本号掲載）
- 七、マルクス主義の発展——（次号掲載）

六 マルクス主義の成立

マルクスが「おぎゃー」と生声をあげたときに、すでにマ

ルクス主義であったわけではないので、「おぎゃー」と生まれたときは、赤ん坊なただから、まだ考える能力もない。だんだんと成長して、諸君と同じように大学生となる。そして、一八四一年にベルリン大学を卒業して、四二年から翌年にかけて「ライン新聞」での執筆活動をやった後、パリに亡命する。さらに、ブリュッセルに移って研究生活に入り、二つの手稿を書く。その一つが四年の『経済学および哲学に關する手稿』であり、もう一つは、四六年に執筆された手稿であって、それが、現在では、ぼくたちのまえに『ドイツ・イデオロギー』として邦訳されて、一冊の本となっているものです。ぼくとしては、この『経済学・哲学手稿』の執筆し

た時期に、マルクスが、はじめてマルクス主義者になったのだ、というように考えているのです。これは、マルクスの二十六才になってゐる年であります。諸君も、そろそろ二十六才に近づくんて、あと何年かしたら、この『経・哲手稿』と同じような論文ができるかどうか、それによって、きみたちとマルクスとの、頭の素質を比較してみる。これは、今後の人生航路において、きみたちにとって役に立つことじゃないかと、ぼくは思うんですがね。いま、ここで、シャベツという梯という人間の頭脳と、きみたちの頭脳とを、比較するということでも、かまわないのですが、しかし、この梯という言葉は大したことないんで、諸君の方でも問題にしていないうでしよう。しかし、せめて、マルクスの二十六才頃までの頭脳と比較して見ることは、おおいに意味があることと存じます。マルクスは二十六才にして『経・哲手稿』を書いた、そして、この『手稿』における思想的な立場が、ずっと最後まで貫きとおせるほどのものであったということに、ぼくたちとしては、マルクスの頭脳の非凡であったということを、感得しないわけにはゆかない。そのマルクスが、この『経・哲手稿』で開拓した道を、すなわち、その新しい方法論を、生

資本論における方法と世界観（中、その一）（梯）

涯をつうじて貫いたという、その辛棒つよき、その方法論的に一貫した学問的態度、これには、ぼくなどは、とうてい足もとにも及ばない、というだけでなく、ぼくたちとしては、そういうところを、おおいに学びとるということにしなければならぬと存じます。マルクスの最後に成しとげたものが、いうまでもなく『資本論』であるわけなんです、この『資本論』は、体系化された理論であると同時に、また実践的な意味をもった体系でもあることは、言うまでもありません。こうした学問的体系にまで発展させてゆくところの、その萌芽形態が、すでに『経・哲手稿』のなかに展開されていたのであります。それだけでなくて、この『経・哲手稿』において、マルクスは、はじめてマルクス主義者になったのだ、というように、ぼくとしては、まえまえから主張してきているわけなんです。

ところで、この『経・哲手稿』において始めて成立した、というばあいの、そのマルクス主義とは何かということについては、レーニンによって簡潔に定義つけられているのであります。この有名な定義については、皆さんも先刻ご承知のところです。要するに、マルクス主義が成り立

六七（三二九）

つためには、三つの思想的な源泉があった、ということの指摘を、レーニンが明確にしていたものでした。そして、この三つの思想的源泉として挙げられたものは、ドイツの観念論哲学とイギリスの古典経済学と、それから第三に、フランスの空想的社会主義とであります。ここで、ドイツ観念論哲学というのはカントに始まって、フイヒテ、シェリング、を経て、ヘーゲルにいたるところの、それぞれの偉大な哲学体系を、ふつうには、哲学史的な知識どおりに想いだして結構であります。マルクスが最初に先づ取りあげたのは、これらの連続的に発展していった諸体系における思想的な諸問題を、すべて解決することによって成立した、と自称しているところの、また客観的にも、そのように理解しても、だいたいいにおいて間違いないところの、ヘーゲルの哲学体系と、この偉大な体系を成立せしめた方法論としての弁証法であった、ということには問題の余地はありません。マルクスは、のちに、カント哲学をフランス革命のドイツ的表現である、というふうによく評価したこともあり、また、フイヒラ哲学の思想的系譜にある社会主義者としてのヘスの影響も受けていたはずだ、という角度から、若かったときのマルクスの思

想的形成を考えることもできますが、マルクスが、その若かった頃に、ベルリン大学で、ヘーゲルの講義を直接に聞いたわけではありませんが、その思想的な影響は、ヘーゲルの弟子のなかの左派のグループをつうじてのものであったにしても、カントやフイヒテの哲学思想からの影響が間接的であったのに比べて、直接的であり、きわめて深いものであったのであります。年譜によりますと、マルクスは、その専攻のはずの法学を勉強するかたわらに、三一年に死んだヘーゲルの哲学そのものを、三七年になって、集中的に研究し出したということになっております。

そこで、このようにヘーゲル哲学の研究を、やっていただきマルクスが、どのようにしてマルクス主義という異質の思想を創造することができたのか、ということについて、ただいま、お話ししたレーニンの定義どおりのものとして、まず理解したうえで、申しあげることになりますと、それらの三つの源泉的な思想を、そのまま受け継いで、総合的に統一した、というものではありません。その逆なのであって、これらの三つの思想にたいして、マルクスは批判的、否定的な態度を堅持するものであります。だからといって、全面的な

拒否の態度でもって相手にしないというのでは、これらの三つの思想は、マルクス主義の源泉には、なりえなかつたことになりませう。そのかぎりでは、それぞれの三つの思想にたいして、マルクスは、それぞれの悪いところは、捨て去るにしても、それぞれの言いところは承けつぐ、という仕方でも対処した、ということになります。いいかえると、このような批判的継承という方法でもって、三つの源泉的な思想を、それぞれ深く研究した、というわけでもあります。ところで、このような批判的継承のことを、アウフ・ヘーベン、すなわち、止揚する、ということになっていることについては、皆さんも、ご承知のほすのところでしょう。

そこで、まず、このアウフ・ヘーベンとしての批判的継承ということが、古典経済学においては、どうなっていたかということを見てもみますと、さきほど申しあげてきたように、この古典経済学の代表しているスミスなりリガルドの理論体系的思想的内容は、資本家の立場に立つて打ち出されたものであります。そのかぎりでは、このブルジョア的な思想内容という点は、批判して斥けてしまわねばなりません、しかし、その科学性という点は、すばらしいことだ

資本論における方法と世界観（中、その一）（梯）

から、これを受け入れる。つぎにヘーゲルのばあいは、この本日の講義で、あとから、詳しく、お話ししたいと思つているので、これは、前世紀の三十年代頃までのドイツの、ブロイセンの絶対主義の権力機構のイデオロギーであると規定できるので、そのかぎりでは、ヘーゲルは反動の巨頭であるというわけですね。現代の日本で、自民党の佐藤首相が、もしも、あのぐらゐの人間じゃなくて、仮りに、すばらしい世界的な思想家であるとすれば、もしくは、このような世界的に一流で後世に名を残すような思想家を、その政策を基礎づけるための理論的代弁者として持っているとするれば、そのような自民党の総裁としての佐藤栄作なる人物から、たとえば共産党の宮本書記長が教えを受けないわけにゆかないというようなことが、いや、現在の共産党の中央委員の方々よりはズーと若い、たとえば反代々木系の諸派に属する学生や青年たちこそが、なんとかして自分たち自身で考えてゆこうという姿勢を持っているかぎりでは、そのような自民党のバックにある偉大な思想家から、おおいに学びとる態度に出るはずだと思えるようなことが、そのような奇態なことが、前世紀の四十年代の初めに行われたというわけ

六九（三三二）

なんです。事実としてヘーゲルは、これからもお話ししてゆくつもりなんです。プロセインの絶対主義のイデオロギーとして、反動的な役割を担わされていたのです。しかし、若き時代のマルクスとしては、このヘーゲル哲学における、その封建的ないし神学的な立場に立っている思想内容をば、容赦なく切り捨ててしまわねばならないにしても、このヘーゲルの哲学体系のなかにあるところの、その正しい思想的内容は、たとえば弁証法というものにたいしては、おおいに学んで教えを受けるといふ態度に出なければならなかったというわけであり。この弁証法的な頭の働かし方を学びとるというばあいに、そのまま継承するというのではなく、これを唯物論の立場において批判的に受けつぐわけですが、このヘーゲル哲学のアウフ・ヘーベンということは、たゞいま、お話しした古典経済学のアウフ・ヘーベンということと、同時に進む古典経済学のアウフ・ヘーベンということと、同時に進むことには、異なるのであります。ということは、経験科学としての経済学の領域に、弁証法を生かすということになるのです。そして、このような同時のアウフ・ヘーベンという仕事が最初に行われて、そして成功した労作が『経・哲手稿』だと、ぼくは言うのです。そして、ここでマルクスは

はじめてマルクス主義者になる、というのがぼくの持論なんです。この『経・哲手稿』では、主として、スミスの国富論が批判の対象とされており、そして、そのテーマとしては、当時の俗流経済学をふくめた「国民経済学」なるものが、自明の前提としていたところの私有財産制度を、ヘーゲルの『精神現象学』において展開されている思弁的弁証法によって、解明する、ということに焦点が絞られているのであります。とにかく、このようなものとして、この『経・哲手稿』では、古典経済学とヘーゲル哲学とが、はじめて結びつけられた、ということになるのです。このことは、レーニンの定義によりますと、その時代における最も偉大な哲学的思想と最高の社会科学の理論とを、同時に、批判的に摂取した、ということになります。その時代の一流の哲学者なり経済学者を相手にして、それらを、あれもいかん、これもいかん、しかし、それぞれには、こういう長所がある、という研究の仕方、独自の道をひらいた創造的な学者として、若きマルクスは出発したわけなのであります。そして、このことは、ただ理論的に創造的であったということだけでなく、このことが同時に、実践的にも、そうだったということになるので

あります、当時では、フランスのサン・シモン、フーリエ、イギリスのオーエンというような空想的社会主義者たちの思想がドイツでも広く読まれるようになっていました。そのために、ドイツにおいても、ワイトリンクやヘストか、さらにフランスのブルードンといったような社会主義者も出てきているわけですが、これにたいして、当時のマルクスとしては、それらの空想的な社会主義の立場にたつて、いや、それを批判しようという立場にたつて、そのうえで、古典経済学とヘーゲル哲学とを結びつけることに努力した、ということのために、この結び付け方そのものが、同時に、この社会主義なるものを、空想的なものから科学的なものへ転化することができた、というわけなんです。これがマルクスの、さきほど言ったように、たんに理論家として、すばらしい、というだけのことでなくて、同時に、実践のための理論を打ち出して、そして、さらに傑出した実践家となつていって、その後科学的な社会主義の運動を、国内だけでなく、国際的にも指導することになるわけなんです。このばあいには、理論が、同時に実践の意味をもっている。実践のために無理して理論を作るんじゃないくて、学界の最高水準の理論を打ち出し

資本論における方法と世界観（中、その一）（極）

たことが、そのまま、実践の原理になつているのであるから、資本主義を变革するという巨大なる目標、いいかえますと、将来の時代において、共產主義社会を打ち立てなきゃならぬという一つの大きな目標も、出てくることになる。そのような社会主義的な実践の背景には、こういうように、すでに、すばらしい思想が創造されていた、というわけであります。しかも、そのような思想の芽ばえが、皆さんとしても、もうあと数年たったら、作りだしてゆかなきやいかんという、その年ごろのマルクスの頭脳のなかに出来あがつていたということ、マルクスは、若いときから、すばらしい思索力を、もつておつた人間であつた、と言わねばならないことになるわけであります。

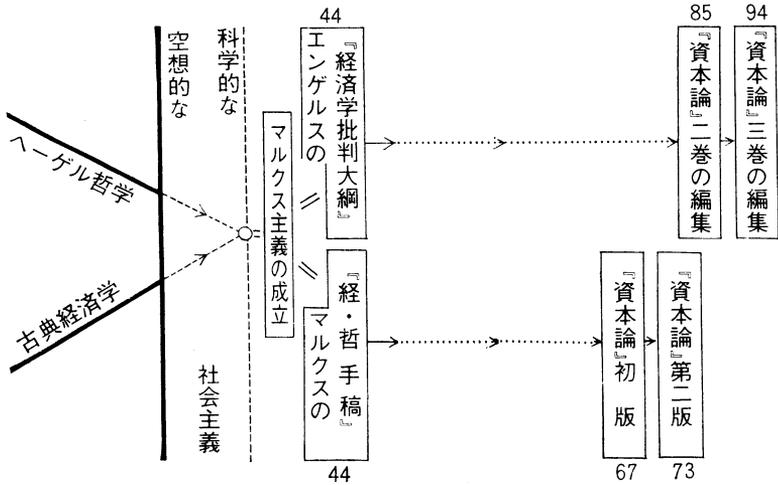
そうすると、マルクスという人間は、ぼくたちとは最初から異つた別の人間だというふうなことになると思われそうですが、そうではない。きみたちと同じ普通の人間、まじめな勉強家であつたのであつて、ただ、マルクスの生きていた時代が、若いマルクスの頭脳を、そのように鍛えあげた、というように解釈しないと、いけない。たとえば、ぼくたちが『資本論』を読むというときに、このことが何のためになる

のかということの自覚があるのと、ないのとでは、その読み方は、おおきく変わってくる。ここで多少は差しつかえそうでありますが、ついでに言ってみると、戦争以前に、ぼくたちが『資本論』を読んだときの、その『資本論』にたいする態度と、戦後の大学で、自由自在に『資本論』についての講義が出来るという状況での、若い研究者たちの『資本論』の読み方、いや読み取り方、すなわち『資本論』にたいする態度とは、これらの二つの態度を比較してみると、そこに違うところがあるんじゃないかと、すくなくとも、ぼくとしては、感得しているわけなのであります。たとえば、戦前なり戦時中において『資本論』を読んでいたら、刑事が勝手に来て、承諾なしに書斎へはいって、マルクス主義に関係した本を、さっさと盗んでいくんですからね。思想掛の刑事は、平気で泥棒をやっていた。法律によって保障された泥棒であったわけです。国家権力を発揮する立場のこととしては、こうしたことは戦後の現代でも見られることであります。こんどの一〇・八の事件にしても、羽田へ集った学生たちを「暴徒」という。このごろでは、もう、ぼくたちが毎日読んでいる新聞でも「暴力学生」という活字が使われるようになってきてお

ります。しかし、警察当局の方も機動隊を動かして暴力を使っている。どっちが先かというふうなことですね。これは、鶏が先か卵が先かという議論と同じことであって、ナンセンスな問題です。暴力を使うことが良いことか悪いことかというふうな問題ではない。問題にしなければならぬことは、なぜ、学生のデモが暴力を使うようになったのか、その原因を考えて見るといふことにある、と思っているんですがね、すくなくとも、ぼくはネ。

また脱線してしまつて申しわけありませんが、お話しを本筋にもどすことにいたしました。ここに掲げている図表(Ⅳ)の説明に、はいつてゆくことにしましょう。これは、一見して明らかのように、マルクス主義なるものが成立するにいたるための、すなわち、レーニンという三つの思想的源泉を、同時にアウフ・ヘーベンするための学問的努力を、その思想的系譜として、図式で表わしたものであります。ぼくとしては、従来、このマルクス主義の成立を、本日、いままで話してきたとおりに、ただ、マルクスの労作にかぎって、そして、彼の四四年の『経・哲手稿』で始めて成就したものとしたり、このことを図式で表わして参つておりました。しかし、

図表Ⅳ



資本論における方法と世界観（中、その一）（梯）

本日の講義を、皆さんの前で、やろうと多少とも考えを巡らして見た末に、四四年のエンゲルスの『国民経済学批判大綱』なる労作においても、レーニンの定義どおりの規定に、かかっているものと見ないと、いけないのでないか、というように思うことになりました。そこで、従来から用いてきた図式を、すこしばかり複雑にしたものが、この図表(Ⅳ)なのであります。左側の実線で示してあることは、くりかえして申しあげるまでもなく、三つの思想的源泉であって、ヘーゲル哲学と古典経済学との同時的アウフ・ヘーベンが、そのまま、また同時に、当時の空想的社会主義を科学的社会主義にまでアウフ・ヘーベンすることになっていく、ということを示してあるわけです。これらの三つの思想的源泉が、マルクスなりエンゲルスなりにおいて、それぞれ独自の勉強の過程で、どのように同時にアウフ・ヘーベンされるにいたったのか、という二人のそれぞれの思索のプロセスは、事実としては、これら二人の経歴や勉強の仕方などが実際に、どんなものであったか、ということ、たどってゆかないと、兩人における違いは解らないのですが、この図式は、同時的アウフ・ヘーベンすることができたはずだ、という共通性

を、ただ論理的なものとして、同一に扱っておいたわけでありませぬ。この同一の同時的アウフ・ヘーベンという思索のプロセスを、破線で示しておきました。そして、エンゲルスでは、四三年の年末に執筆しておいたものを四四年の二月に発行された『独仏年誌』に寄稿したものが、彼の「国民経済学批判大綱」であるわけですが、マルクスは、このエンゲルスの論文に強い刺戟をうけて、そして、同年の三月から八月までに、現在、ぼくたちの前に『経・哲手稿』という一冊の訳本としてあるところの、その原稿を書きあげているのであります。マルクスは、ここでマルクス主義者となつて、その後、の経済学研究における労苦を重ねて、さいごに『資本論』第一巻の初版を六七年に、その同じ第一巻の再版を、七三年に出版して、さらに、その第二巻および第三巻として、ぼくたちが入手できるようになっていく体系的に完結した大著の、その原稿と、さらに、今世紀に入つての一九一〇年に、カウツキーによつて編集された『剰余価値学説史』という著書になる、その素の原稿を執筆して、一八八三年の三月に、エンゲルスに見まもられて、ロンドンで死ぬ、ということになっています。ところで、この『資本論』の第二巻および第三巻

として、マルクスの遺して死んでいった、その偉大な原稿を整理して、マルクス自身の叙述した第一巻における体系化の方法を、忠実に継承して、そして発行せしめた人は、いうまでもなくエンゲルスなのであります。これらのことを、図式では、右の端の方に位置づけて、示したつもりなのであります。マルクスおよびエンゲルスには、マルクス主義を成立せしめて、そして最後の『資本論』の完結にいたるまでに、それぞれ、多くの労作を次から次へと出していつていることについては、諸君も、ご承知のところなのですが、それらの著書なり論文なりは、この図表では、省略しておきました。点線が、それらの過程を示しているものと、お考え願えれば、それでよいわけです。

そこで、この(Ⅳ)の図表において、重点的に、お話しをしていくべきことは、この図式の左の端の方のことなんです。が、このばあいには、三つの思想的源泉の同時的止揚というプロセスを、示しているわけですが、このような図式は、たがいまも申しましたように、あくまでも論理的な意味のものであるということをお断わりしておかねばなりません。あるいは誤解されることもあろうかと、まえもって、そのような

誤解を防ぐいみで申しておきたいのですが、この三つの思想的源泉を弁証法的に止揚する、という思索の過程は、事実としては、青年期のマルクスにしてもエンゲルスにしても、それらの研究生活において、ヘーゲル哲学の研究と、古典経済学その他の色々な経済学説の研究とは、同時に併行して行われたわけではありません。この二つの別々の研究過程が一致せしめられるところの、その総合的統一の方法として、唯物論化されたアウフ・ヘーベンが成就されたときに、マルクス主義なるものの理論を成立するにいたった、ということができるのですが、しかし、この理論形成のための事実経過は、それとしておいて、そこにおけるイデオロギー的関連を、ただ論理的に整理すれば、この図表の示すようなことになる、ということなのであります。

同じようにマルクス主義の理論面の形成は、そのこと自体が、同時に、空想的社会主義を科学的社会主義にアウフ・ヘーベンすることを意味している、いいかえれば、この理論面の形成が、そのまま、社会主義の空想的なものから科学的なものへの転化になっている、いいかえますと、マルクス主義の理論面と実践面とは、あい表裏した同一の思想的事実とい

資本論における方法と世界観（中、その一）（梯）

うことになっている、というように示してあるのは、やはり、レーニンの定義した言葉の内容を、ただ論理的に整理すれば、そうなるというだけのこと、というように理解して頂かないと、ぼくとしては誤解されることになります。事実、マルクスの関心を持ち研究したところ社会主義は、ただ単にフランスの空想的な社会主義だけに限らないし、空想的社会主義というかぎりでは、同時代のイギリスのオーエンを当然そのなかに含めて理解しなければならぬし、それらの社会主義的思想の影響を、直接なり間接なりに受けた同時代のドイツの社会主義者にも、マルクスおよびエンゲルスの社会主義は、その承譜的な関連をもっているはずだ、というように必然的に、ぼくたちは予想できるはずであり、そうした研究も、日本でも社会思想史の専門家によって現に行われているのであります。また、マルクス自身としても、社会主義を科学的なものとして打ちたてる努力の過程では、それが、四四年以前であらうと以後であらうと、その視角から人類の全思想史を振りかえって見るといふことを、やらなかったはずはありませんし、すくなくとも、近代初期の空想的社会主義者たちの業績を研究することや、フランス革命当時のパブーフ

の共産主義の思想を再評価するということは、事実として、マルクス主義の理論にもとづくところの、その実践面における理論なり行動なりを、より豊かなものに、しかも法則的に确实なものに、成長せしめていったのであろう、ということとは疑問の余地のないところだ、というくらいことは、ぼくとしても十分に知っております。

それは、それとしても、もう一つ問題になるだろうと思うことは、マルクス主義の成立の時期を、ぼくが、まえまえから、四四年の『経・哲手稿』に置いている、ということであって、このような、ぼくの主張にたいしては、学界でも、すでに異議が出されていることについても、ぼくとしても、すでに知っております。この問題点をも含めて、図表(V)で示されているような論理的な整理が、はたして正しいものとして承認されているかどうか、ということなどを調べて見るためにも、ここで、マルクスの、ついでにエンゲルスの、それぞれの青年期における思想的な成長が、実際において、どのようなものであったか、という事実的な経過について、お話ししておくことは、このことについては皆さんの良く知っているはずのことであるとしても、無駄なことには必ずしも

ならないのではないかと存じます。ぼくは、戦後になって、この『経・哲手稿』を分析的に吟味して、そして、ここにおける一連の手稿の諸断片の思想を、体系的に整理したことがあります。これが『経済哲学原理』という拙著ということになっておりますし、さらに戦前にさかのぼって振りかえって見ますと、すでに昭和十年の二月に『社会』という雑誌に寄稿した「人間労働の資本主義的自己疎外」という論文を、発表しております。こうした事実によったのかどうかは、ハッキリぼく自身にも解らないのですが、戦後の思想界ないしは経済思想学界では、ぼくが初期マルクスの研究者である、というようにも言われてきておるのであります。しかし、これは、ぼくにたいする過大評価ともいうべき一つの誤解であって、実のところは、四四年の『経・哲手稿』だけを、ある程度、掘り下げて見たという仕事しか、やっていないのであります。この『経・哲手稿』という一連の手稿の諸断片が、執筆されるまでのマルクスの業績も、この『手稿』以後のマルクスの諸労作についても、分析的に読んだことは、戦後をつうじて一度もなかったのであります。それにしても、この『経・哲手稿』が、青年期のマルクスの頭脳のなかで、どの

ようにして育まれてくる必然性に立ったのか、また、この『手稿』の思想が、それ以後に、どのように発展していったのか、こういう問題は、ぼく自身の頭のなかには、いつかは明瞭にしなければならぬものとして、すなわち、一つの残された研究テーマとして、秘んでいたことは、事実であります。そういうこともあって、この本日の講義で、青年期のマルクスに、さらにエンゲルスを加えて、これら二人のことについて、それぞれの生い立ちから始めて、そして、どのように学問的な研究を進めていったか、といった事実経過を、たどってゆくということは、ぼく自身にとっても、役立つものが多いということになります。

それにしても、ぼく自身は、青年期のマルクスおよびエンゲルスの色々な労作についての知識を、正確なものにして持っているわけではありません。いまから三、四十年まえの、ぼく自身の若かった頃には、これらマルクスおよびエンゲルスの初期の労作には、一とおりは眼を通したはずだ、と回想はできるのですが、それらの理論内容については、それらの思想内容についても、現在では、きわめて曖昧もことしたもとのとして記憶に残っているか、あるいは忘れてしまっている

資本論における方法と世界観（中、その一）（梯）

ものさえもある、というしたいなんです。そこで、ここに本日の講義として、皆さんに向って、お話し致したい、といっても、ぼく自身の現在の實力では不可能なことなんです。ところが、たまたま、別の必要があって、ぼくの手許にあった一冊の本、それは、関西大学教授の杉原四郎さんの著わした『マルクス経済学への道』という本を、ぼくは通読せねばならない機会がありました。この本は、著者から寄贈してもらっていたのですが、この本の講義をするにあたって、この本を読み直して、杉原さんの研究成果としての知識を、そのまま借り受けて、ぼく自身の本日の講義の一つの内容とさせていただきます。まったくの受け売りの知識を、これから、ぼく自身の知識であるかのようにシャベってゆくわけですが、この点は、ただいま申しましたような事情と、ぼく自身にも役立つ良い機会であると考えたことと、これらの理由によるというわけなので、この点は、ご容赦を願うて聞いていただきたいものと存じます。さて、受け売りの知識なんで気が引けるわけですが、年譜に記されてある順序に添うて、お話ししてゆくつもりですが、ただ一つ、ぼくのいうマルクス主義の成立までのマルクスおよびエンゲ

ルスの初期のことを、後回わしにして、このバリ時代以後のブリュッセル時代のことを、順序を逆にして先きに話してゆかせてもらうことを、ご了解しておいて貰いたいと思うのであります。というのは、バリ時代の四四年にマルクス主義が成立した、といっても、これは、それが完全なものとして成立してしまつて、その後には発展することが、なかったのか、と問われると、そこに問題が生じてくるからであります。これから申しますように、事実として、マルクス主義は、ブリュッセル時代に、また、それ以後にも、その理論内容なり思想内容においても、発展していつているわけであります。したがつて、四四年にマルクス主義が成立した、といつても、それは、マルクス主義の萌芽形態が、レーニンの規定が適用できるかぎりのものとして、成立したのだ、というように、あらかじめ、ご理解しておいて欲しいというのであります。

マルクスは、プロイセン当局の圧迫で、彼が主筆であつた『ライン新聞』を廃刊して、自らも、これからの研究生活に入りうるような環境を求めて、一八四三年の十月から、バリでの亡命生活を始めているのですが、このバリ在任は、四五年の二月まで続くことになっております。このバリ在任の時

期のなかで、とくに一八四四年という年は、まことに記念すべき年であつた、といわねばならないのであります。その意味は、第一に、ただいま申してまいりましたところの『経・哲手稿』の全体を構成する一連の諸断片が、この年の四月から書き始められて、八月上旬には、その執筆が終つていたのであつて、そして、この『経・哲手稿』において、マルクス主義の成り立つために不可欠な三つの思想的源泉が、はじめアウフ・ヘーベンされることになる、とする考え方が正しいとすれば、マルクスが始めて、マルクス主義者になることができた、とすることができるところの、その年に当るわけでありませう。そういう意味で、記念すべき年である、といはねばならないわけであります。

しかし、この『手稿』を構成する諸断片の全体は、ついに公表されないままで今世紀にまで埋れていつてしまつていたのであります。それにしても、この『経・哲手稿』におけるマルクス主義の成立のための前提になつたところの二つの論文、すなわち「ユダヤ人問題によせて」と「ヘーゲル哲学批判序説」との二つの論文は、前年の四三年の九月から十二月までのあいだに、すでに執筆されていたのですが、『独

「仏年誌」の発刊の後で、その誌上に掲載されて、したがって一般に公表されていたのであります。しかも、この『独仏年誌』なるものも、マルクス自身がルーゲと一緒にあって、四年の二月に発刊したものであります。そうしますと、マルクスは、自らの執筆しておいた二つの論文を公表するために、この『年誌』を発行したかのようにも、ぼくたちには受けとれそうですが、ただ、それだけの意図で発刊されたものでないことは、いかえると、一般に公開された発表機関であったということは、いうまでもない事実であるはずでしょう。そのことを、ものがたっている一つの例証ともなるわけですが、エンゲルスの寄稿論文が、すなわち「国民経済学批判大綱」が、この『年誌』に掲載されている、という事実を挙げることができるのであります。この寄稿論文も、エンゲルスとしては、やはり前年の末から四年の一月にかけて執筆しておいたものであります。

ところが、この寄稿論文が『年誌』によって公表されたということは、ただ、それだけのことでは無論、ないのであって、マルクス主義の成立ということにとって、非常に重要な意味をもっていたということに、ここで、ぼくたちは、と

資本論における方法と世界観（中、その一）（樞）

くに注意しておかなければならないことなのであります。と申しますのは、あとで（「次号掲載分の第八節のところ）、お話しすることになりますが、マルクスは、このエンゲルスの論文を読んで、おおいに刺戟をうけて、経済学の研究に腰を据えねばならないという決意を促された、という事実を、いみしているからであります。いかえますと、マルクスが、マルクス主義者になるための、すなわち『経・哲手稿』を執筆するための、不可欠な契機になっているという役割を、このエンゲルスの論文の公表という事実が、果している、ということに、ぼくたちは注意しておかねばならない、と申し上げるわけであります。エンゲルスとしても、この『独仏年誌』に公表されたマルクスの二つの論文や、『フォール・ヴェルツ』に発表された「一プロシヤ人著『プロシヤ王と社会改革』にたいする批判的傍注」など読んで、深い共鳴を感じたのに違いない、と推定されるのであります。そこで、エンゲルスは、四年の夏の末頃に、マンチェスターを去ってドイツへ帰国することになった、その機会に、途中、パリに立ちよって、十日間ほど滞在して、マルクスに会見する、ということになっているのであります。この十日間ほどの期間の談し

合いが、二人のあいだの生涯をつうじた協力関係のキツカケとなつてゐることについては、だれしも疑い得ないところとなつて、ぼくたちにも伝えられております。このことが、ぼくが一八四四年を記念すべき年だとすることの、その第二の意味であり、また、その理由となつてゐるわけであります。

さて、この二人のあいだに行われた会見と談合とのことについて、エンゲルス自身は、後になつて（『論文』「共産主義者同盟の歴史によせて」のなかで）回顧談を述べております。――

「私が一八四四年の夏に、マルクスをパリに訪ねたとき、理論上のあらゆる分野で、われわれの意見が完全に一致していることが、あきらかになつた。そして、このときから、われわれの共同活動が始まるのである」。――この言葉こそが、この会見の歴史的意味の重要性を、なんびとも疑いないものにしてゐるわけであります。しかし、この注目すべき会見は、それまでの二人が、それぞれ独自に、無関係にやつてきた学問的な歩みと、また、同時に、それぞれに社会運動への関心を深めてきつたつあつたというプロセスとによつて無自覚ながらも準備されてゐたものであつた、ということにも、ぼくたちは注意しておくべきことは、いうまでもないことでし

よう。マルクスがパリに亡命し、エンゲルスがその前に、すでに四二年の十一月にマンチェスターに行つておつたのでありますが、それまでの二人の執筆活動を調べるならば、だれにも明らかのように、これらの二人は、それぞれに、観念論的なヘーゲル哲学の批判的継承において、すでに完全な唯物論者になつてゐたわけですし、また実践的にも、急進リベラリストないし革命的民主主義の立場から、共産主義の立場に移行してゆくように迫られていたのであります。そして、共通の発表機関になつた『独仏年誌』においては、共産主義の思想を打ち出す基礎づけを、二人とも、やつていて、そして、この同一のテーマにおいて、お互いに刺戟しあい共鳴しあつた、というわけであります。すなわち、マルクスの方は、パリにおいて、フランスの革命運動と社会主義の運動に身近かに触れて、それを哲学的に基礎づける努力をしていたのたいして、エンゲルスの方は、経済学プロバの研究とともに、イギリスの労働運動と社会主義とを、資本主義の発展過程の必然的結果として、基礎づけようとする努力を、していたのであります。それぞれの、それらの努力の成果は、マルクスにおいては、とくに「ヘーゲル法哲学批判序説」に

典型的に示されることになり、エンゲルスにおいては、マルクスに経済学研究的の緊急性を刺戟したことになる「国民経済学批判大綱」という論文となり、これによって、それぞれの努力の成果を結実させているわけであります。

これらの双方の努力の成果は、二人を相互に牽引させたことに相違はないにしても、しかし、いざ会って、話し合つて見たときの、その会談の内容としては、これら双方の公表された労作についての評価を交換するだけにとどまったのでは決してない、ということが容易に、ぼくたちに推察させることができるところであります。と申しますのは、エンゲルスとしては、その年の九月から執務を始めて翌四五年の三月までに脱稿することになっており、そして、一冊の著書として出版することになっているところの、すなわち『イギリスにおける労働者階級の状態』にまで結実するための、その予備知識を、この会見のさいには、すでに具体的なものにしてははずであります。すでにマンチェスター滞在中に、かれは、イギリスの労働者階級の状態を特徴づけるのに必要な資料を広汎に集めていたのであって、そのかぎりでは、これらの全資料の研究から出てくるであろう結論的な若干の意見

資本論における方法と世界観(中、その一)(梯)

は、この会見のさいには、いまだ未整理ながらも、彼の念頭を支配してははずであります。他方、マルクスの方にも、未公表の『経・哲手稿』を構成することになる一連の手稿の断片を、すべて執筆しおえた、まさに、その直後に、エンゲルスの来訪を受けたわけであります。二人のあいだでは、それぞれの未発表の、したがって双方ともが、それまでには知らなかった相手側の飛躍的に前進している、それぞれの思想内容について、お互いに披歴しあつた、ということは、十分に推察されるわけであります。それだけではないのであります。それから二人で、どういうテーマについて、協力して行くべきか、という将来のことについて、話し合いが進んでいるのであります。二人の最初の共同労作は『聖家族』の出版となつていますが、エンゲルスは、自分の担当部分の執筆を、パリ滞在の十日間のうちに、完了していた、というのが事実なのであります。こうしたものとして、過去の労作や現在の考え方やについての話しあいから、さらに進んで、今後の協力を誓いあつて、そして、そのことに早速ながら着手してゆくことにしていた、といういみで、この会見は、まさに注目すべき会見であつた、といわざるをえないわけでありま

す。このあたりのことについては、ローゼンベルクの『初期マルクス経済学説の形成』という本に詳しく述べられてありますし、いま申し上げたことも、この本に拠って、ぼくなりに、まとめて見たものにすぎません。

ところで、マルクスとエンゲルスとの会見は、この四四年の八月が最初のものであったのではなくて、実は、『ライン新聞』時代に、一度だけ、行われていたのであります。それは、四二年の一月に、エンゲルスがブレーメンの工場から商用でイギリスに派遣されるのですが、その途中で、この新聞社の編集室に行つて、マルクスと会つていた、ということなのであります。この最初の会見では、当時の二人のあいだには、それぞれの「政治的見解が喰ひ違つていた」ために、お互いの話し合いも、突っ込んだものにならず、そっけなく終つた、というに記述している人も、わが国におられます。ぼくとしては、この会見の不発に終つた理由については、なにも推測するだけの詮索は、やっておりますが、その後の二年たらず経つての第二回目の記念すべき会見と、比べあわせて見て、そこに、推測できることは、四二年の時期においては、エンゲルスの経済学の研究は、これからということである。

あつたわけでありませう。そして他方、マルクスとしても、当時の社会的な現実問題に当面して、経済学をやらねばならぬいと痛感しはじめた頃であつたにしても、そのかぎりでは、ヘーゲル左派の哲学の角度だけから、歴史的現実を具体的に捕えることの誤りに気づきはじめていた程度の意識水準にあつたわけでありませう。そういう程度の研究水準にあつたかぎりでは、すくなくとも経済学についての研究内容をお互いに披歴しあうということも、ほとんど不可能であつた、というほかないのであつたとも、言えそうであります。この点が、第二回目の記念すべき会見のときとの大きな違いであることは、だれにでも明らかなことでしょう。エンゲルスとしては、三九年の三月に、すでに「ウツパタールからの手紙」を書いて、ドイツの貧困者富にたいする深い同情を示していたのであつて、四二年の夏に、マンチェスターの織維商会の社員であつた親父さんの意志にしたがつて、その代理人として赴任するさいに、たまたま起つていたところの、イギリスの織維工業地方のストライキに、強い関心を惹かれて、先進的な資本主義国の労働運動に身近かに触れながら、それを研究してやろうと、はやくも決意を固めていたのであります。こ

の点から見ますと、マルクスとの第一次の会見当時においては、エンゲルスの方が、マルクスよりも、経済社会についての知見は、マルクスよりも豊かであったはずであります。

そして、イギリスに渡った直後に、エンゲルスは、「国家危機についてのイギリス人の見方」とか「政党の立場」とかの四篇の論文を『ライン新聞』に寄稿して、労働者階級による社会革命という思想を固め始めるわけであります。さらに、チャーチスト運動やオーエン主義の運動に接触した後は、イギリスの急激な階級分化による大衆の貧困の状態を、たんに宗教的ないし倫理的にしか問題にしていなかったところのカーライルを、批判するのでありますが、しかも、この批判的論文を『独仏年誌』に寄稿しているのでありますが、そして、チャーチスト運動が、労働者階級にたいして、ただ合法的改革を押しつけている点を、批判的に指摘するところまで、その社会革命の思想を成長せしめているわけですが、その時は、すでに第一次の会見から二年後のこととなっております。にもかかわらず、このエンゲルスが「国民経済学批判大綱」を『独仏年誌』に寄稿してくるまでには、マルクスとしても、このようなエンゲルスの研究過程にたいして特別

の注目をするにはならなかった、というように、第二次の会見の時から、過去にさかのぼって類推して、第一次会見が、思想的接触を不発に終らしめたのではないか、とも言えるのではないかと存じます。

要するに、さきに申しましたように、第二次の会見が注目すべき歴史的意義をもつたことのためには、このような準備期間が必要であった、ということになります。このような準備的な業績を積んでおかねばならなかったということは、マルクスについても当てはまるわけがあります。すなわち、マルクスとしても、プロレタリア革命の歴史の意味を、哲学の角度から基礎づけるにいたったのは、四三年に『独仏年誌』に発表した二つの論文、すなわち「ユダヤ人問題について」と「ヘーゲル法哲学批判」とににおいてのことであり、エンゲルスの「国民経済学批判大綱」に刺戟されながら、四四年の一連の手稿の諸断片（『経・哲手稿』）を擲筆するまでの精選が必要であったわけであります。このような双方の思想的ないし理論的な未成熟の段階にあったかぎり、第一次の会見が、たんなる顔合せに終わったのではないか、ということは言えそうであります。双方の「政治的見解の相違」が、そのよう

な不発なものしてしまった、ということが事実だとしても、二人とも、急進リベラリストから社会主義者の方向への途を、それぞれに別個の経歴と研究過程とに制約されながらも、歩調を揃えて歩んでいたわけでありませう。すくなくとも、プロイセンの絶対主義の権力機構にたいする批判的な態度が、その思想的領域から政治的領域へと現実化していった、ということは、これら二人の理論的出发点において共通していたのであります。事実として、エンゲルスは「プロイセン国王フリードリッヒ・ヴィルヘルム四世」なる論文を書いておりませうし、マルクスとしては、この政治的批判の方向を『ライン新聞』の諸論説で、いよいよ明瞭なものにしてゆくわけであります。現象的にですが、このように考えて見るとき、第一次の会見において、すくなくとも、ドイツ国家におけるかぎりの「政治的見解の相違」ということは、二人のあいだに、ちょっと想像できないところではないか、というように、ぼくは思うのですが、これは、たんなる皮相な解釈にとどまるものかも知れません。

このことは、しかし、ともかくとして、他日の誰かの研究にまつことにして、ここに一つ、大事な点は、政治の問題に

しろ経済の問題にしても、それらを理論的に解明するばあいには、マルクスなりエンゲルスにかぎらないことですが、どのように頭を使って考えていったか、という哲学の初歩的にして本質的なところに、ぼくたちは注意することを忘れてはならないということでありませう。そうしますと、マルクスもエンゲルスも、ヘーゲル左派の先輩の影響をつうじて、ともにヘーゲル哲学を研究することから、その理論的生活を初めるための準備を、やったのであります。そのかぎりでは、二人とも、すべての問題を解明するために、どのように頭を使うべきか、という方法論を、ヘーゲル哲学から学んでいるわけであります。そして、ヘーゲル哲学における方法論なるものは、いうまでもなく、弁証法なのであります。マルクスとエンゲルスとは、この弁証法を、フォイエルバッハの影響下にありながらも、なおかつ批判的に継承しようとした点では、共通しているのであります。しかし、この批判的継承という哲学研究のプロセスで、ヘーゲルの弁証法なるものの論理構造について、その理解の仕方が、マルクスとエンゲルスとにおいて、違いはなかったか、どうか、ということ、この点を、ぼくは吟味して見る必要があると思つうのです。そし

て、この違いのあることについては、とくに、現在では、ほとくたちの前に一冊の本として手に入れることになっていくところの、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』と、マルクスの『経・哲手稿』とを、仮りに取りだして、双方における弁証法と比較して、申しあげてみたいと存じます。

このことを、ここで、簡単に申しあげることにはいたしませんと、要するに、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』の叙述に見られる弁証法は、ヘーゲルの弁証法の具体的な内容を、その過程的發展の面だけを唯物論化して継承しているかざりものとしては、客観主義な一面性に限られたものになっている、というように、ぼくは指摘しないわけにはまいりません。そして、そういう点では、マルクスの『経・哲手稿』に比較いたしますと、ヘーゲル弁証法の批判的継承という点では、エンゲルスよりもマルクスの方を高く評価するためでもあるかのような言い方を、ぼくは、従来、申ししてまいりましたが、この同じ論法は、エンゲルスにたいしても、適用することができずとも知れません。四三年末のエンゲルスといえども、ヘーゲルの弁証法なるものが、なるほど、弁証法を客観主義的にしか捕えていない『国民経済学批判大綱』を執筆

資本論における方法と世界観（中、その一）（梯）

していたのが事実であるとしても、マルクスの「疎外された労働」という未発表に終った一断片の内容を、例の記念すべき第二次の会見のさいに、マルクスから、おそらく聞かされたのであろうと推定されますが、そのばあいに、エンゲルスとしても、その理論内容を理解して、そして、それに共鳴していたはずだ、と考えることができるとするならば、弁証法の主体的側面の展開は、マルクスに委せておいて、自分は、その客体的側面を経済社会の歴史的發展過程のうちに生かしてゆくことに、重点を置くことにしたのであって、ヘーゲルの弁証法なるものが、客体的な対象過程の論理であると同時に、主体的自覚の論理でもなければならぬ、ということに、当時のエンゲルスとしても、すでに先刻承知していた、あるいは、マルクスによって、気づかされていた、というように推定することも出来るわけでありませぬ。

そうしますと、エンゲルスの弁証法についての理解が、客観主義的な一面性のものでしかなかったという批難は、不当であるということになります。もし、エンゲルスが、弁証法なるものの具体的内容を、ただ、歴史的實在の發展過程の論理だけのものとして、一面的にしか把握することができな

つたし、そのかぎりでは、客観主義的誤謬におちいついていた、というように決めつけてしまうことにしますと、ブリュッセル時代以後、生涯をつうじて、マルクスと協力しあった学問的な立場の一致という事実は、ぼくたちにとって、はなはだ理解の出来にくいことになるわけです。この協力の堅かったという事実のなかには、唯物論という学問的立場を新らしく打ち立てるための方法論において、すなわち、唯物論の立場における弁証法の理解において、これらの二人のあいだには、喰い違いは何もなかった、ということ物をがたるものが含まれていた、というように、ぼくたちに推定せしめることにならないでしょうか。もしも、二人のあいだに方法論的な喰い違いがあったとしたら、そこに、論争が起って、二人は、別々の学問的な道を歩んでいたとも、考えられることができるはずであります。それにしても、『国民経済学批判大綱』と『経・哲手稿』の「疎外された労働」とを、並べて比較して見るとき、さきほど申しましたような、重点の置きどころの違いというのが、明らかに見られることは事実なのであります。これは、二人のあいだの協力関係が始まるまでの、それぞれの独自の研究的な経路が、別々であったとい

うことから、くるのではないか、と思われれます。

この研究経歴の違いということについては、本日の講義でも、のちほど(日本誌後号で)、申してゆきたいと思っておるのでありますが、ヘーゲルの弁証法の批判的研究という点においては、その腰の据え方が、エンゲルスよりもマルクスの方が、強かった、ということ指摘することができるのであります。そして、このマルクスのヘーゲル批判に腰を据えて取りくんだ、その研究の成果が、同じ『経・哲手稿』のなかにも、その「第三ノート」の最後の断片として、収められているところの「ヘーゲル弁証法ならびに哲学一般の批判」であります。この哲学的な断片における理論内容を前提としてのみ、はじめて「疎外された労働」という体系的断片が、マルクスによって執筆されたことができた、というように、ぼくとしては解釈しているのであります。事実として、どちらを先に執筆したのか、ということは別にしても、当時の若きマルクスの頭脳のなかには、これらの二つの断片に展開されている思想内容が、一緒になって纏っていた、ということは確かなことであります。すなわち、ヘーゲル批判によってマルクス自身の固有の哲学が打ち立てられ、そして、同時に、

この哲学的立場から私有財産制度を原理的に解明することができたところの、その「疎外された労働」という経済学的な概念が、マルクスの脳裏に判然としてきた、という関連にあるのであります。すなわち、若きマルクスが、哲学から経済学への接近を、その学問的な歩みにおける努力と苦闘とを示しているものとして、これらの二つの断片は、切っても切り離せない関係にあるわけでありませう。そういう意味で、ドイツ版の「マルクス・レーニン主義叢書」において、これら二つの断片が、切り離されて収録されていることにたいしては、ぼくとしては、若干の抵抗を覚えないわけにはゆきませうでした。このことは、とにかくとして、マルクスが、その研究の焦点を、哲学から経済学へ移行せしめねばならない、という心境になっていたときに、あたかも、そのときに、エンゲルスの「国民経済学批判大綱」が『独仏年誌』に発表されて、これがマルクスに強い刺激を与えることになった、ということについては、さきに申しあげました。このことが、第二次の記念すべき会見のための決定的な前提になっている、と推察することは極めて自然なことでないか、と思うしだいです。事実としても、この第二次の会見以前におい

資本論における方法と世界観（中、その一）（梯）

て、すなわち二月末のこの「国民経済的批判大綱」という寄稿論文の発表以来、マルクスとエンゲルスとのあいだに文通がはじまっていた、とも言われており、この二人のうちの、どちらの方が先きに手紙を出したかについては、ぼくは知りませんが、エンゲルスのパリ訪問を、マルクスとしても、待ち望んで歓迎したはずのものであったことは、ぼくたちの十分に推定できることでもあります。であればこそ、この一度の会見での、十日間にわたる学問的な話し合いの成果として、今後の研究上の約束が成立して、そして、この約束は、ただちに実行に移されて、共著としての『神聖家族』の出版を計画し、それぞれの執筆の分担を決める、ということになったものと、ぼくたちは理解できるわけがあります。

この四五年になって出た『神聖家族』では、マルクスとエンゲルスは、共通の思想的な先輩でもあり仲間でもあったところのブルーノ・バウエルを中心とした青年ヘーゲル派の連中が、依然としてヘーゲル的な自己意識の枠内にとどまっているし、現実的な社会問題にたいして、批判は、するにしても、その批判が、当然ながら観念論的な抽象性のものでしかない、という思想的状況を、二人で協力して打ち破ろう、と

いう意図を明示しているのであります。四五年の二月に、マルクスは、フランスの内務省の決定によって国外に追放されることになって、ブリュッセルに移住いたします。そして、その三月に「フォイエルバッハに関するテーゼ」を執筆しております。七月頃になって、同じくブリュッセルに来ていたエンゲルスと一緒に、翌八月にかけて、イギリスに渡り、主としてマンチェスターに滞在して、経済学の研究を進めるのですが、ブリュッセルに帰った後の、四六年の一月から五月

までのあいだに、一つの著作のために、エンゲルスの協力のもとに専念するのですが、この著作の出版は実現しなかったものの、その大量の原稿は、現在では『ドイツ・イデオロギー』として、ぼくたちに読まれているわけでありませう。このように伝記的事実を辿って見ただけでも経済の領域についての不可欠の知識を獲得するためには、マルクスの方がエンゲルスによって引きまわされ、学問的にも案内されて刺戟を受けつつあったのでなかったか、というような想像を、この間のいきさつにおいて、ぼくたちに、させるものがあるわけでありませう。とくに、この『ドイツ・イデオロギー』では、フォイエルバッハをも含めての、ヘーゲル左派の諸思想が、

全体として再検討されているだけでなく、もう一つの重大なことは、ここで、はじめて、史的唯物論が、二人の協同労作として打ち出されていることでもあります。フォイエルバッハの抽象的な人類の思想は、それぞれの経済的構造をもった各時代、各段階に区別され、人類の全歴史過程を唯物論的に観る、という唯物史観なるものが、二人の協同労作として、あたらしく確立されたわけでありませう。

エンゲルスは、後になって（『空想的社会主義から科学的社会主義へ』において）、「社会主義が、空想的なものから科学的なものに発展するうえでのマルクスの二大貢献は、史的唯物論と剰余価値論との確立である」と述べておりますが、このエンゲルス自身の言葉どおりに、マルクス主義なるものを理解しようとするならば、マルクス主義の成立というばあいの、その時期を四四年に限定するということには、問題が生じてきそうであります。しかし、このばあい、エンゲルスのこの言葉の意味は、マルクスおよびエンゲルスが、自分たちの主張する社会主義なるものは、たんに自分たちだけで最も正しいものと確信して、そして、自分たちの主張している以外の、すべての社会主義なり共産主義を、空想的なものとして、批

判的に斥けるだけのことでなく、第三者の立場から見ても、マルクスおよびエンゲルスの主張する社会主義が、他のどんな社会主義の主張よりも、科学的であることを承認せざるをえない、というところまで持ってゆくためには、史的唯物論と剰余価値論とを、なお新たに打ち出す必要があった、というようにも解釈することが、ぼくたちに許されると思うのであります。いいかえますと、マルクスおよびエンゲルスが、社会主義なり共産主義について、自分たちの主張が他のどんな人間の主張よりも学科的に正しいものなのだ、と主観的に確信しているだけではなくて、この確信が客観的な真理として、学界なり思想界なりにおいて承認せられるようになるまでには、四四年の時期の労作の理論水準では、いまだ不十分であった、というようにも、エンゲルスの今の言葉を、ぼくたちは解釈できるのでないかというのであります。

そういうように、仮りに、このエンゲルスの言葉が解決されるとしても、それでは、四四年の『経・哲手稿』において、マルクス自身としても、「おれは、この労作において、やつとマルクス主義者になったのだ」と、いいかえると「他の色々な社会主義の思想を克服したところの、自分独自の社会主

資本論における方法と世界観(中、その一)(梯)

義を打ち出すことに、はじめて成功したのだ」と、いうふう  
にマルクス自身が自覚的に確信を固めたのか、どうか、とい  
うことになりますと、これもまた疑問の余地が十分に残りま  
す。というのも、マルクス自身としては、そのような主観的  
な確信を四四年の『経・哲手稿』で改めて確認して、このこ  
とを宣言する、ということは、事実として、なかったからで  
あります。むしろ、マルクス自身としては、もっと以前か  
ら、自分独自の社会主義の立場を築きあげるための努力を重  
ねてきた、というのが事実であるわけですから、そして、他  
の色々な社会主義的な思想から影響されながら、それを克服  
するという努力を積み重ねていった、というのも、また事実  
であるわけですから、マルクス主義なるものを自称するか、  
しないかにかかわらず、マルクスとしては「自分は自分なり  
に思想的に成長してきているんだ」という確信を、四四年の  
『経・哲手稿』と現在に呼ばれているところの当時の一連の  
手稿の執筆完了を俟たなくても、除々に固めてきていたはず  
のものと、ぼくたちは考えねばなりません。そういうわけ  
で、マルクスが四四年の『経・哲手稿』なる労作でもってマ  
ルクス主義者になりえた、ということは、マルクス自身の主

観的確信に拠るものではないし、マルクスの主観的確信の如何にかかわらず、後世になって、マルクス主義の研究者たちによって、そのように規定されたものである、ということについては問題はないはずであります。

と申しますのは、いうまでもなく、マルクス主義には三つの思想的源泉がある、というレーニンの規定を、マルクスの初期の多く労作に当てはめて見たばあい、どの労作において、これらの三つの思想的源泉が、同時にアウフ・ヘーベンされていることになっているか、そして、そのように同時的に止揚された労作において、はじめてマルクス主義が成立した、というように後世のマルクス研究者が客観的に規定しようとしているだけのことにすぎない、というわけであるからであります。ところで、このような規定づけについては問題はないといたしましても、初期マルクスの思想的成長についての研究者のあいだでも、どの労作をもってマルクス主義の成立したことにするか、ということになりますと、色々と解釈の違いがあつて、この点では、なお現代でも問題は残っている、と思わねばなりません。ただ、ぼくとしては、まあええから、四四年の『経・哲手稿』をもって、そこに、レ

ーニンのいう三つの不可欠な思想的源泉が同時にアウフ・ヘーベンされている、と解釈してきているのです。このように『経・哲手稿』において始めてマルクス主義が成立する、という見解を持つ研究者は、日本では、現在、ぼく以外にも若干ながら居られるので、ぼくとしても、現在も、そのような解釈を主張し続けているというしだいなんです。ただ、この講義では、マルクスならぬエンゲルスの『国民経済学批判大綱』においても、すでに、マルクス主義の成立のための不可欠な三つの思想的源泉が、同時にアウフ・ヘーベンされていたのでないか、ということ新たに付け加えておいたわけがあります。その理由については、さきに申してまいりました。そして、ただいまも、そうした解釈にたつて、ヘーゲルの弁証法にたいする二人の継承の仕方の差異を、問題にしてみただけであります。

そこで次に、さきのエンゲルスの言葉の意味との関連のことなんですが、そこには、「社会主義が科学的なものに発展するためには」と述べられている、その「発展」という文字に、あえて引っかけ申しますならば、マルクス主義の成立ということと、その発展ということとを、段階的に区別でき

るのでないか、と思うのです。ただいま申しましたような、  
ぼく自身の解釈が、学界で受け入れられ一般に承認されうる  
かどうかは解りませんが、仮りに客観的な真理として承認さ  
れるという前提に立つてのことなんです、そうすると、こ  
ういうように言えるのではないかと、ぼくは思うのです。――

まず、マルクス主義なるものは、まず、エンゲルスの『経済  
学批判大綱』とマルクスの『経・哲手稿』とにおいて成立し  
た、しかし、それらの双方の独自に執筆された両論文におい  
ては、三つの思想的源泉は一つの新たな思想的体系に統一さ  
れていることは事実であるとしても、この新たに創りだされ  
た高次の思想としてのマルクス主義の内容は、これから出発  
して、次から次へと順序を追って、より具体的な理論を生み  
だしてゆくことのできる端緒としての思想内容でしかないも  
のと見るべきであって、そのかぎり、第二に、このマルク  
ス主義の端緒としての萌芽的な形態から、次から次へと打ち  
出されてくる、より具体化された理論の形態を、一つ一つ辿  
ってゆくところに、マルクス主義の発展というところを見るこ  
とができるわけである。――こういうように考えることは、  
決して無理のないことであって、おそらく何方にも承認され

うるのではないかと思うのです。

そこで、また、エンゲルスの言葉にもどってみるのであり  
ますが、その「社会主義の空想的なものから科学的なものに  
発展するために」と、述べられている箇所についてなのです  
が、この箇所の意味を逆にとつて見ると、マルクス主義の成  
立した時期の四四年においては、その社会主義のモメント  
は「まだ科学的なものになっておらず、なお空想的なもので  
あった」というようにも理解されそうですが、しかし、マル  
クスもエンゲルスも、別々の研究経路を歩んでいても、とも  
に、空想的社会主義を批判しようとして努力していたことに  
は、問題はないわけですから、このような逆の解釈は、ここ  
つけの間違った推論でしかないもの、と考えねばならないで  
しょう。むしろ、社会主義を「科学的なものにしよう」と努力  
しながらも、なお不十分であった」というように理解せねば  
ならず、そのかぎり、科学的社会主義の萌芽の形態を、四  
四年において、始めて打ち出していた、というように言える  
のだ、と理解できるわけでありませぬ。

この点は、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』について  
も、マルクスの『経・哲手稿』についても、同様に言えるこ

とであります。この二人の双方の論文を比較してみても、指摘できることは、エンゲルスの論文の方がマルクスの論文の方よりも、すくなくとも社会主義のモメントにかぎるばあいには、より科学的なものとして、あるいは、厳密に言いなおしますと、対象的なものとして、その叙述が展開されているということでありませう。このことは、エンゲルスの方が、科学としての経済学についての研究を、マルクスよりも、より早くやっていたことに基つくとせねばなりません。それにたいして、同じ私有財産制度をテーマとして批判的に取り上げていながら、マルクスのばあいは、この制度を弁証法的に

止揚するための、その主体的なモメントの分析に重点を置いていたのであります。ところで、このヘーゲル弁証法の批判的母継承という点では、エンゲルスの方に、客観主義的なものでしかないという批難を、受けるほかならないような欠点があります。このような双方における長所と欠点とが、四四年の八月の記念すべき会見において、お互いに認め合うという胸を打ちあげた話し合いが、おそらく、行われたのではないのでしょうか。そして、この時から、それぞれの長所は各自で生かしながら、それぞれの短所は、お互いに埋めていこうで

はないか、というような、相互に補いあいながら二人の長所を分担して延ばしてゆくという協力が、約束された、ぼくたちに容易に推察されるころであります。そして、この約束が『神聖家族』と『ドイツ・イデオロギー』の共同執筆として実現してゆくわけであります。

このように、二人が、それぞれ別々に成し遂げていたところのマルクス主義の、その発展の過程が、このような相補的な協同作業として出発したということは、まことに注目すべきことでないかと存じます。この相互理解のうえでの相補的協力関係が二人の生涯をつうじて貫徹されて、マルクスの死後に、エンゲルスが『資本論』の第二、三巻の原稿を体系的に整理することに成功することになっている、ということも考えても、このことは、注目すべきことであるわけですが、この『資本論』へのエンゲルスの協力ということだけでなく、そこまでにいたる過程での、二人のあいだにおける相補関係は、たとえ共同執筆でなくても、別々のそれぞれ独自の著作なり労作なりのあいだにも、つらぬかれていたものとして、ぼくたちは、そのように理解して、双方の文献を比較、照合しつつ、マルクス主義の発展ということを考えねばなら

ぬものとしても、また注目すべきことだ、というように、ぼくは考えるわけなのであります。

たとえば、この発展の第一歩の成果としての史的唯物論にしても、マルクスの『経・哲手稿』における人類史の思想の延長上において考えることは不可能でないにしても、人類史の時代区別を、それらの経済構造の差異によって基礎づけるところまでもってゆくプロセスにおいては、エンゲルスの経済史的知識を媒介にしていたのでないか、エンゲルスの協力を得たからこそ、マルクスとしても比較的に楽に成し遂げることができたのでないか、というようにも十分に推定できるわけであります。この階級史観によって、『経・哲手稿』における人類史の思想は具体化され、また、疎外関係として捕えられたにとどまった階級関係なるものも、生産力と生産関係との関連というように捕えなおされて、その経済的構造についての分析を深めていくわけですが、これらの経済学の面の深化ないし具体化が、すべて、エンゲルスの協力によるものだ、と言うものではありませんが、しかし、マルクスとしては、この協力を受けたうえで、独自の勉強をやっていたものと、ぼくたちは考えねばなりません。すなわち、マルクス独

資本論における方法と世界観(中、その一)(梯)

自の経済学の研究としては、ブリュッセル時代に、四七年の『哲学の貧困』から四九年の『賃労働と資本』へと、いわゆる「狭い意味の経済学」の樹立にまで、進歩していつているわけであって、そして、ここまできると、エンゲルスとしては、経済学においての先輩づらをするには、もはや出来なくなつて、続いては、経済学の内容的部分についての意見交換をする、ということになつていたのでないか、とも推察されます。とにかく、このような相互の協力関係を通じて、お互いの成長してゆく思想内容を、相互に理解しあつて、そして、意言交換を、随時に、やつて行く過程において、マルクス主義の発展ということが、考えられうる、というわけであります。